
詩歌・小説の中のはきもの（第6回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

66 以前は出先で、自分の脱いだものが人の世話になることも多かった。私の家など、今日は父が下足番のいる場所へ出かけるという日は、母は父の下駄が汚れてないか、鼻緒がゆるんでないか、仔細に点検し、そして必ず、「足のものをお世話になるのだから」と、下足番への心付けを父に託していたことを思い出すのである。 宮尾登美子

★『記憶の断片』から。いつか雑誌を読んでいたら亭主の靴を磨く女性は2割と出ていた。友人に当たってみると一人残らず自分で手入れしていると答えた。主婦のハウスキーピングの中から靴磨きは排除されつつあるのである。別に驚くことではない、そんなものであろうと思った。ただ過去にはここに書かれているような細やかな気づかいをする習慣が存在していたということだけは記憶しておいていいだろう。

「破れしきる父わが靴のみじめさも子の云はずなり磨かれてあり 松田常憲」。昔は妻のみならず子供も父親の靴を磨いていたのであった。

67 当時、下町はすべての道路が舗装されていたが、雨降りのときはみんな長靴や雨ぐつをはいた。さすがに着物姿の人は足駄や日和下駄をはいたが、結構、長靴や雨ぐつの需要は多かった。従ってそ

の修理屋も必要だったのだろう。ゴム長の修理は、開いた店の周囲に沢山ゴム長が並んでいるので、遠くから見ても、その店が『ゴム長の張り換え屋』であることが分かった。 川本博康

★『昭和ひとけたの東京』から。中古自動車、放置・廃棄された自転車、テレビ、ラジオなどが東南アジアやロシア、北朝鮮などに貨物船に山積されて引き取られて行く。日本人がどう意識していようと、日本は豊かな国なのである。子供のころ、町のいたる所で『鑄掛屋』、『刃物の研ぎ屋』、『靴直し』、『傘直し』、『羅宇屋』、『鋸の目立て屋』が修理する姿を見かけた。当時のモノには職人の愛情がこもっていたから、邪険にできなかったのだとも考えられる。修理する職人にも愛情があった。簡単に捨てない環境で育てば、子供は自然とモノを大切にできるようになる。だから今の若い人たちを責めることはできない。

68 いつの頃からか、再びは履いてもらえない新田の靴を、せっせと磨く習慣がついてしまった。朝、玄関の掃除をする時は手ついでに、又、台所でキャベツをきざんでいて、ふと吸い込まれるようなむなしさに襲われた時など、一日に何回でも磨き上げている。だから玄関にはピカピカの靴が一足出してある。藤原てい

★『靴をみがく』から。夫君は作家の新田次郎。女性だけの家庭は無用心なので、表札に男の名前を記したり、玄関に男物の履物を置いているのは良くあることであるが、故人とのつながりをこのように玄関に置いた靴に求めているという人を初めて知った。遺影のような平面よりも、位牌、仏像などの立体の方が心を癒すのには優れている。靴のフォルムがこんな風にも役立つのがうれしい。

69 泥棒がはいろいろとする前に、まずその家の様子を探り、玄関の履物の脱ぎ具合を見る、というのである。靴や下駄がきれいにそろえて脱がれているうちは、戸締りもしっかりしているだろうと、家の中も整理が行きとどいているのであろうからはいるに難しく、もしはいれてもあまり収穫がない、と判断して泥棒があまり帰って行くのだそうである。

黒井千次

★『新行儀読本』から。今の住宅の構造では、宅配便業者か書留配達郵便局員を除いて玄関の履物の脱がれ方を観察できない。最近の泥棒はベランダの整理状態など見るというが、靴や下駄ほどの情報量はない。脱ぎ方と同時に家族数、性別、年齢、貧富、履物の減り方から性格まで分かったのだから、昔の泥棒稼業は楽だったにちがいない。

70 ひよいと思い出したのが、奥鬼怒の手白沢温泉だ。山の奥のこの山小屋にまでは西洋文明はそれほど及んでいないので、ここではまだ混浴も見られる（別浴もある）のだが、この宿にはスリッパがない。素足で歩いても足裏が汚れたり、足にとげをささないように、廊下はいつ

でもきれいに拭き掃除されて床板のささくれなどないように手入れされている。私にはこれは高度な文化と見えるのだが、この国の近代はそういう文化を捨てる方向に進んできた。 高田 宏

★『物と心の履歴書』から。著者は家の中を板張りにしてからスリッパを履くようになったが、脱げそうになったりして歩きにくく、履き忘れしたりもして素足でいることが多かった。それがあるとき旅先で買った藁草履が履き心地がいいので、冬でも素足で過ごしているという。私も冬でも暖房なしの素足で暮らしている。自宅の場合、トイレの中のスリッパも履くことはない。ナチュラルな生活の基本は裸足・素足であるという信念を持っている。

71 「一体その靴といふものは、何でこしらへてあるものぢやな。」

「靴ですか、靴は……」若い男は無作法な坊主をこらしめるには、なんでも強い事を言ふに限るとでも思つたらしかった。「靴は牛の皮のものもあれば、象の皮のこともあります。それから虎の皮のだってあります。」

「ほほう。して見ると、みんな獣の皮ぢやな。乃公のは草鞋と云つて、米の皮ぢやぞ。」と言つたかと思ふと、和尚は泥のへばりついた草鞋のまま、すつと玄関を駆け上つて中へ入つてしまった。

薄田泣菫

★『完本 茶話』から。市会議事堂で開かれていた慈善音楽会は「靴の外昇降を禁ず」としてあった。梅垣謙道和尚はこの音楽会の受付を突破したのである。下駄はやかまいし音を立てるので禁止したのだろうが、靴以外の音を立たない草鞋まで排除する敷居の高い硬直した取り決めは、他者を包容

する「慈善」の精神とは相容れないものであることを主催者に気づかせたかったのであろう。

72 今の革靴はウォーキングシューズとかいって合成樹脂のものが多くなってしまったが、あれはいかん。

あれはいけません。

カカトは絶対に革にかぎるのだ。

一枚一枚の革が貼りあわされ、重なって厚い層になっているところに味があるのだ。

…層になったカカトの革たちは、一筋縄でいかない連中ばかりだ。

東海林さだお

★『平成元年のオードブル』から。剛直と強情と反骨の連中である革のカカトがいいというのである。靴は歩くためのものであるのにウォーキングなどと当たり前すぎる名称にした、オール与党みたいな靴というのは確かにもの足りないものだ。手ごわい野党的な部分があってそれと折り合いをつけて足になじんだ靴が最高なのである。靴店の中のカーペットの上を十数歩試歩して“審議終了”なんていう靴に愛着が湧くものではない。

73 私がこれまで訪ねたことのある民芸館では、どこでも入口で履きものをぬいでスリッパにはきかえた。これは、靴のまま入る大美術館にくらべて、来館者と展示品とのあいだにより個人的な関係をつくり出す。特定の個人、たとえば柳宗悦が目ききをして集めたものを見せていただくという感じになる。横山貞子

★『日用品としての芸術』から。外履きと内履きが異なるというのは一つの文化であ

る。意識すると否とにかかわらず、人はそこで頭を切り換えてリラックスする。公共の施設におけるスリッパの良い点は、あれを履いたときに「特定の個人」でなくなることだ。老いも若きも、金持ちも貧乏人もなく平等に迎え入れられるのは素晴らしいことではないか。

74 この靴はもう駄目だ

靴屋に

修理を見放されたことがある

あきらめられずもう一度

妹を代理に立てた

結果は同じ

街頭の靴直し屋で

なんとか急場をしのいだが……

関根 弘

★『靴』の第1聯。第2聯に修理しながら履いている靴が3足あるとある。修理をするに値するいい靴を持ち、それを大事に履いていることが分かる。靴修理店の店頭に随分くたびれた靴を見ると、大事にされているのが分かり嬉しいものだ。どんどん履き捨ててもらえればそれはそれで靴屋にとっては有り難いことなのであるが、自分たちが汗して造った大して傷んでいない靴が“弊履”のごとく見放されるのは、性格の不一致などとわけの分からないまま婚姻を解消されたような気がして、納得がいかない。